

# いとくら

ITOKURA

国際仏教学大学院大学

文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「東アジア仏教写本研究拠点の形成」ニュースレター

第7号  
2011.12

## 《古写経紹介・その六》

『仏説菩薩投身餓虎起塔因縁経』／松村 淳子

餓えた母虎に菩薩が身体を与えた前世物語

## 《古写経紹介・その七》

金剛寺伝来の『宝篋印陀羅尼経』二本と舍利信仰／小島 裕子

## 《調査日記》

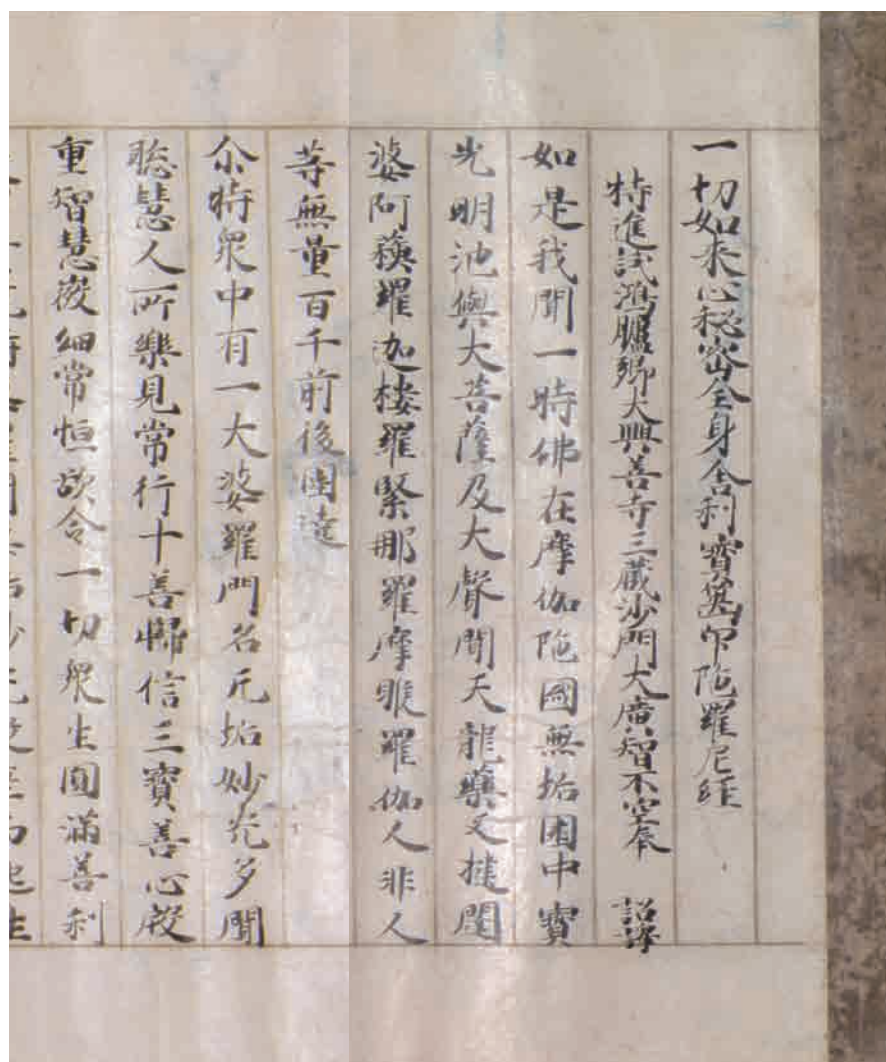
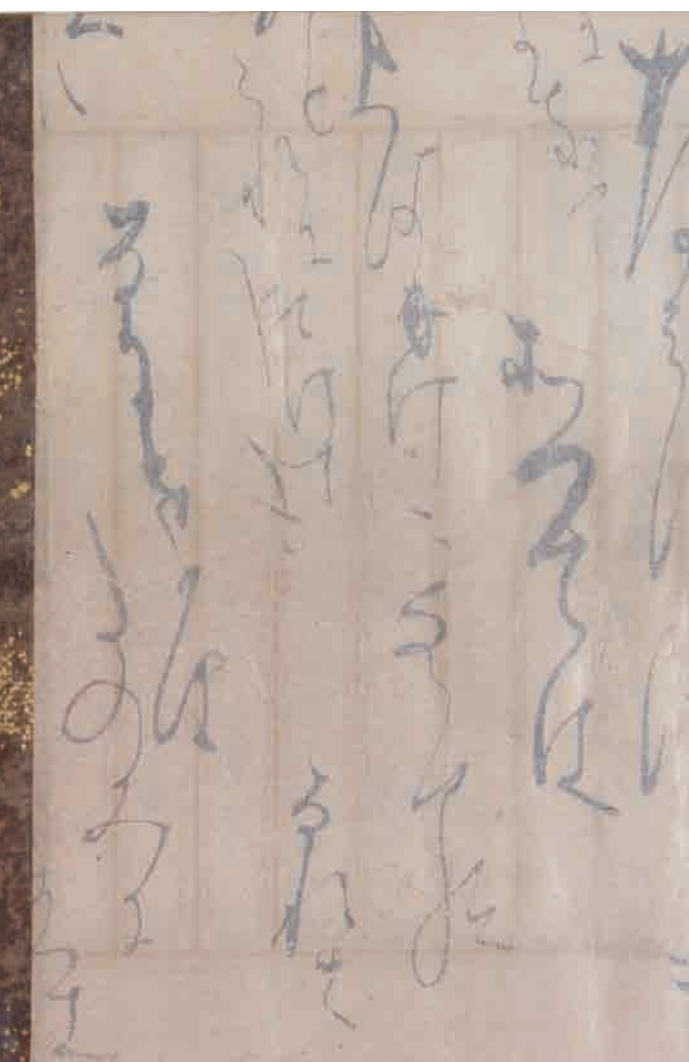
中国国家図書館／三宅 徹誠

## 《「日本古写経を利用した仏典研究への助成」紹介》

古写経とデータベースの研究上における活用／ラポー ガエタン

## 《活動記録》

国際仏教学会でのパネル発表／林寺 正俊



# 写本一切経と刊本大蔵経

落合 俊典

最近の仏教研究の中で、特に漢訳經典のテキスト研究は新時代を迎えたと言っても過言ではないでしょう。活字本しか無かった時代から比べれば、写本一切経や刊本大蔵経などが、揃いも揃って並び置かれた様子を想像すると圧倒されるに違いありません。

写本一切経を見てもみずと正倉院聖語藏の隋唐写経二四三卷、同天平十二年御願経七五〇卷、同神護景雲二年御願経七四二卷がパソコンの画面に美しい姿を見

せ始めました（丸善、二〇〇〇年）。それに加えて金剛寺一切経（四五〇〇卷）のデータベース（本学、二〇一〇年）があります。そして、まだ画面に出てきていませんが、恐らく近い将来に全容を表わすはずの七寺一切経（四九五四卷）、興聖寺一切経（五二九四卷）などがあります。これらのデータベースが完成すれば合わせて二万巻を越す大画像群となります。さらに現在進行中の国際敦煌プロジェクト（International Dunhuang Project）が提供する敦煌写経・写本の画像集成も膨大であります。これらはテキスト研究に不可欠の資料となるでしょう。

一方、刊本大蔵経は従来の影印版大蔵経（高麗再雕版・磧砂版・趙城金蔵版・嘉興版・乾隆版・洪武南蔵・永樂北蔵等々）に加えて刊本大蔵経の濫觴となった開宝蔵そのものが精巧なレプリカとして昨 year 上梓（開宝遺珍、二〇一〇年）さ

れました<sup>①</sup>。現存する開宝蔵は僅か十二巻に過ぎませんが、刊本大蔵経に関する諸問題を検討する上で必要欠くべからざる重要資料なのです。

まず開宝蔵と比較検討する文献は、開宝蔵の覆刻版と言われている趙城金蔵版と高麗初雕版です。後者については、韓国の高麗大蔵経研究所が撮影集成した約一八〇〇巻をインターネットで見ることが可能ですが、そうなのは昨年からであります。

中国、韓国、日本ばかりでなく敦煌本を所蔵するイギリス・フランス・ロシアなどがまさに蘭菊の秀芳を競うかのように公開を速めています。いえ、これは単なる競争ではなく、学術のあり方の問題であります。正確さは当然のこととして、広く世界に向けて公開することが肝要です。この基礎的学術基盤の上に、より一層深化した研究がなされるに違いありません。

近年のテキストの校訂に関しては先ず筆頭に活字本大正蔵の校訂が挙げられます。大正蔵は、高麗再雕版を底本とし、宋・元・明版の三本を対校本とし、さらに宮内庁書陵部蔵の宋版（開元寺版・東禪寺版）や聖語藏の奈良写経なども対校したもので、世界の主要な大学・研究所・図書館に所蔵されています。最近では台湾の法鼓山大学中華佛学研究所がテキスト化（CBETA）し、

日本では大蔵経テキストデータベース研究会がテキストデータ（SAT）を完成させています。これらは大変便利であり、広い書棚を必要ともしないし、検索は瞬時に出来てしまう「すぐれもの」であります。

しかし、CBETAやSATの依拠した大正蔵本には様々な問題点が存しており、個々の經典を、現在揃いつつある諸資料、中でも日本古写経を参照して詳細に比較検討しなければならぬのです。

本年は、高麗初雕版が開雕されて千年のミレニアム（千年紀）であります。その記念すべき年に新たな校訂を行う条件が整備されたことは、まさに千年後にも本年が記憶に呼び起こされるに違いないと確信するのであります。

① 方廣鎔・李際寧主編『開宝遺珍』、文物出版社、二〇一〇年一〇月。収載された経巻は以下の十二点である。①大般若波羅蜜多經卷二〇六（山西省博物院蔵）、②大般若波羅蜜多經卷五八一（中国佛教圖書文物館蔵）、③大宝積經卷二二（中国国家圖書館蔵）、④大方等大集經卷四三（上海市圖書館蔵）、⑤妙法蓮華經卷七（山西省高平県文博館蔵）、⑥阿惟越致遮經卷上（中国国家圖書館蔵）、⑦大雲經請雨品卷六四（山西省高平県文博館蔵）、⑧雜阿含經卷三〇（中国国家圖書館蔵）、⑨雜阿含經卷三九（中国国家圖書館蔵）、⑩十誦尼律卷四六（日本書道博物館蔵）、⑪仏本行集經卷一九（日本南禪寺蔵）、⑫御制秘藏詮卷二三（美国哈佛大学賽克勒博物館蔵）[Arthur M.Sackler 1913:1987]。

（本学プロジェクト「東アジア仏教写本研究拠点の形成」研究代表者）

## 目 次

写本一切経と刊本大蔵経	落合 俊典 (1)
-------------	-----------

《古写経紹介・その六》

餓えた母虎に菩薩が身体を与えた前世物語

『仏説菩薩投身餓虎起塔因縁経』	松村 淳子 (3)
-----------------	-----------

《古写経紹介・その七》

金剛寺伝来の『宝篋印陀羅尼経』二本と舍利信仰	小島 裕子 (7)
------------------------	-----------

《調査日記》

中国へ渡った日本古写経

中国国家図書館	三宅 徹誠 (11)
---------	------------

《「日本古写経を利用した仏典研究への助成」紹介》

古写経とデータベースの研究上における活用	ラポー ガエタン (12)
----------------------	---------------

《活動記録》

日本古写経研究を世界に紹介

国際仏教学会でのパネル発表	林寺 正俊 (13)
---------------	------------

公開研究会	(14)
-------	------

今後の予定・既刊書・スタッフ紹介	(15)
------------------	------

いとくら：私たちが調査している古写経を収める「経蔵」からの造語。「経」を意味するサンスクリット語 “sūtra” には「いと」などの意味があり、また「経」には「たていと」という読みがあることから、「経蔵」を「いとくら」と読んでニュースレターのタイトルとしました。



― 餓えた母虎に菩薩が身体を与えた前世物語 ―

# 『仏説菩薩投身餓虎起塔因縁経』

松村 淳子

奈良の法隆寺にある国宝『玉虫厨子』は、

おそらく日本最古の仏教美術工芸品で、その厨子に描かれた二つの絵「施身聞偈図」と「捨身飼虎図」は、日本人にとってよく知られた、菩薩の前世の物語（本生話）である。最初の話は、仏陀がいない世において、仏法を知りたいと望んでヒマラヤ山の奥深くにまで入って行った婆羅門が、「諸行無常、是生滅法」という詩半分を唱える声を聴き、その後半を聴きたいと思ってあたりを見回したところ、恐ろしい羅刹鬼が唱えたことがわかり、是非とも残りを教えて欲しいと請い願った。すると

羅刹は空腹の余りこれ以上唱えることはできないと言うので、では教えてくださったら、すぐに私の身体を食べ物として捧げるからと約束して、詩の残り「生滅滅已 寂滅為楽」を聴き、それを岩や道や木に書き記した後、絶壁から羅刹の口め



法隆寺所蔵『玉虫厨子』の「捨身飼虎図」

がけて飛び降りるのであるが、その羅刹は実は帝釈天が菩薩の心を試すために化けていたもので、空中で本来の姿を現し、婆羅門を抱き留めるといふ物語である。日本では、『今昔物語集』にも取り入れられていて、そこでは「雪山童子」と名付けられ、若い青年修行者というイメージが持たれている。

もう一つの「捨身飼虎図」は、菩薩が山の奥深くで、出産を終えたばかりの母虎が餓えの余り、乳も出ず、とうとう生まれたばかりの我が仔を食べてしまいうような様子を見て、やはり高い崖の上から身を投げ、

地に横たわったその身体に母虎と七匹の子虎が群がって貪り喰うという図である。こちらは、帝釈天が試したわけではないので、菩薩は本当に死んでしまうのである。日本の美術研究者は、この絵を「捨身飼虎図」と呼んでいるが、実は仏教経典では、「投身餓虎」という表現の方が多く出てくる。「捨身飼虎」というのは、ほとんど『金光明経』とその関連文献にしか現れていないようであり、『玉虫厨子』の絵は『金光明経』に基づいているというのが定説になっている。というのももう一つの有力候補である『賢愚経』では同じような話があるが、子虎の数が二頭だからである。

それはともかく、もともと南方に伝わった上座仏教のパーリ語の説話文献を研究していた筆者が、この物語に注目するに至ったいきさつを少し書いてみたい。筆者は二〇〇八年に初めてスリランカに行く機会を持つことができた。そこで驚いたことは、ドイツで研究した『ラサヴァーヒニー』の最初の物語「ダンマソングカ王物語」が、スリランカのいくつかの寺院の壁に描かれていたことだ。その最初の話は、まさに『玉虫厨子』の「施身聞偈」の話であることは、日本人である私には、すぐにわかったが、漢字で書かれた仏教文献を知らない上座仏教の人々はもちろん、ヨーロッパの仏教学者も全く知らない。そしてもっと驚いたことは、そのスリランカの「施身聞偈」の絵と並んで、「捨身飼虎」の絵が描かれていたことだ。と



中央アジア・クムトラ石窟の壁画  
ここには子虎は描かれていない。

いうのもこの二つの物語は上座仏教のパーリ語の仏教文献には無いからだ。それなのに、スリランカの仏教徒は、まるで日本人が「猿の生き肝」の話や「兎本生」の話を知っているように、この話を知っているのである。どうやら、家庭やお寺の日曜学校でこういう話を聴いているかららしい。でも、もともとどの本に出てくるのかという問いには、お坊さんでも答えられなかった。

そこで、筆者はこの「投身餓虎」物語を詳しく調べてみようと思いついたのである。

よく知られている『金光明経』や『賢愚経』では、菩薩は国王の三人の王子の末子で、名前は摩訶薩埵 (Skt. Mahāsattva) である。他にも『仏説菩薩本行経』、漢訳『菩薩本生鬘論』、『仏説要行捨身経』にあるが、この三つの経典は由来がはっきりせず、だいたいの『金光明経』や『賢愚経』に基づいて、中





回った。そして母后は国王に、「あなたが国庫の財産を借しんだからこんなことになってしまったのです」と非難させた。

一方、チャンダナマティ王子はヴィディシャー国王からもった財産でまた施しをした後、輝かしく素晴らしい行列を仕立ててもらい故郷に帰った。知らせを受け取った父王も道の途中まで出迎えに行き、手を取り合って歓び、チャンダナマティ王子は父母に心配をかけたことを詫び、共に王宮に帰った。

ところが、仏道を求める太子の心は変わらず、暫くして太子は山奥で修行している師匠のことを訊いて、法話を聞きに出かけた。すっかりその法話に心酔した太子は、そのまま山奥で五〇〇人の仲間達と修行するようになった。

母后と太子の妃は、山に籠もって国に還ろうとしない王子の心を翻そうと、多くの施物を持って山奥の修行者達のもとへ出かけ、太子に国に戻ってくれるように懇願した。しかし太子の修行をしたいという意思がとても堅固で覆すことはできないと覺り、悲しみながら国に還った。国王も落胆はしたものの、王后と太子妃があまりに嘆くのを諫めて、「このように道を求めるということとは非凡なことなのだ。その志を尊重しなさい。しかも山は遠くないし、時々はお会いするではないか。食べ物や飲み物を届けて消息を聞くこともできるではないか」と言った。それで、王后と太子妃も納得し、時々、

美味しい食事を届けさせ、太子もまた時には父母に挨拶に来るといようにして何年かを過ごした。

ある日、その山の深い谷で一頭の母虎が七頭の子どもを生んだが、大雪の降る中で食べ物も得られず、餓死寸前となっていた母虎はついに餓えに耐えかねて自分の子を食べようとした。山の上にいた修行者達はそれを見て、「誰か捨身をして衆生を救う者はいないだろうか、今はまさにその時だ」と話した。太子はそれを訊いて、「私の願が叶うときが来た」と、師匠と修行者仲間の元へ行き、「私が捨身をします。どうかみなさん喜んでください」と言った。師匠は、「君はまだ学問を始めて日も浅い。なぜ自分の大事な身体を捨てようとするのか」と言った。すると太子は、「私は昔、自分の身体を千回捨てると願を立てました。すでに過去世に九百九十九回捨身をしたので、これで千回の捨身という願を満たすことができるのです」と言った。師匠と仲間の修行者達は涙を浮かべて、太子が断崖絶壁に向かうのを見送りに行った。

さて、ちょうどその時、ある長者が五〇〇人の男女と一緒に山上に供養の飲食を持ってやってきたが、太子が捨身をするというのを訊いて、彼らも悲しみながら崖の上まで付き従って行った。太子は大勢の前で、自分の大誓願を述べた。「私は今捨身をして衆生の命を救い、早く悟りを完成し、金剛身を得て、まだ救われない人を救い、

悟れない人を悟らせるのだ」。そう宣言して、太子は合掌して虎の前に身を投げた。虎の母子は菩薩の肉を食べて命をつなぐことができた。出来事を知った国王、王后、太子妃、そして多くの人々は、太子の遺骸を丁寧に荼毘に付し、遺骨を宝の器に入れて大きな仏塔を建てた。

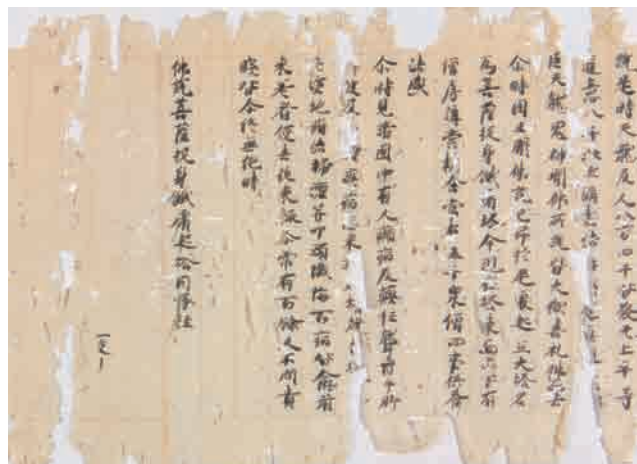


中央アジア・キジル石窟の「投身餓虎図」

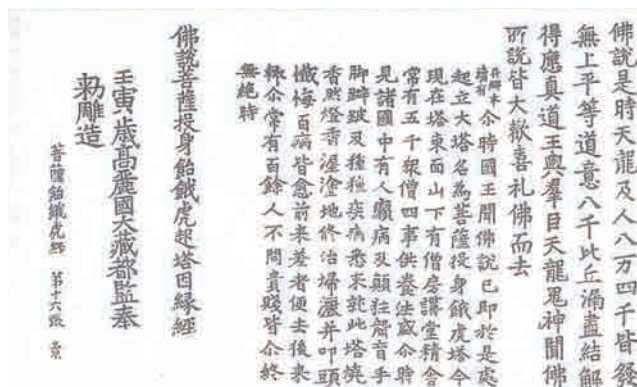
この經典は、一見単なる菩薩の前世物語であるが、仏教思想の上からも重要なことがいろいろと見えてくる。筆者が注目していることの一つは、菩薩が身を人々に食べさせる話が、他にもいくつもあり、それは単に餓死寸前の者の命を救う行為ではなく、身を食べたものは、菩薩の功德の分け前をもらうことになるということである。また、菩薩は、仏陀になるまでの修行の身

であり、大乘では菩薩が仏陀になるための修行そのものが重要なのだが、この投身餓虎物語は、「捨身」という強烈な自己犠牲を菩薩行の最高のものとする大乘菩薩行を強調する流れに属している。そして、人々は、懺悔さんげをすることによって、様々な功德を得られるという、これもあまり注目されてこなかった面が強調されている。

この興味深い經典に注目したところ、本書の古写経研究プロジェクトでは、日本の寺院のいくつかに写本があることを突き止め、とりあえず金剛寺写本を撮影していることを、落合俊典教授に教えていただいた。写本の状態があまりよくないので、読めない部分もあるが、宮内庁所蔵の『聖語蔵』のデジタル版も参照して、『大正新脩大藏經』と合わせてみると、非常に異読が多いことがわかった。特に顕著な例は、この經典の後書きに当たる部分である。釈迦仏が説法を終えると、「この話を『釈迦仏から』聞いた『ガンダーラ』の国王は、その場所に大塔を建て、菩薩投身餓虎塔と名付けた。法盛が訪れた現在、塔の東には大きな精舎があり、常に五千人の僧侶がいた。諸国から癩病らいびょうその他あらゆる不治の病を持つ人々が訪れ塔を供養し懺悔をするとどんな病氣でも治るので、訪れる人は絶えることがなかった」と締め括られるのだが、『高麗大藏經』を底本とした『大正新脩大藏經』では、その前に「丹郷本續有」という言葉が入っている。つまり「丹郷本」には、次のような



金剛寺蔵『仏説菩薩投身餓虎起塔因縁経』巻尾



高麗再雕版『仏説菩薩投身餓虎起塔因縁経』巻尾

話の続きが載っているという断り書きだ。この断り書きは、これ以下の続きは他の本には存在していないという印象を与えてしまう。しかし、この「丹郷本續有」というフレーズは、『大正新脩大藏經』が参照した、宋本、元本、明本、また聖語藏、金剛寺所蔵写本のいずれにもなく、普通に上記の部分の話の最後に繋がっているのであり、「丹郷本續有」というフレーズは『高麗大藏經』にしか見られない。だからこそ『高麗大藏經』に基づいた『大正新脩大藏經』の本文は再検討されなければならないが、經典が版本に彫られるようになるよりはるか以前に手書き写本としてもたらされた古写経が、仏教典籍の研究に非常に重要だということ、筆者も身を以て知った次第である。

ところで、この經典の訳者、法盛という僧についても、ほとんど知られていないが、彼の生涯もとても興味深い。彼の伝記は、五世紀に編纂された『名僧伝』という書物に出ていたが、その後失われてしまった。ところが日本では鎌倉時代に『名僧伝抄』という抜粋集が作られ、幸いに、法盛の簡単な伝記が残されている。また落合俊典教授の研究で、彼が残した旅行記『歴国伝』四巻も、日本に伝わり十二世紀ころまでは存在していたらしいことがわかつている。

法盛は中国でも中央アジアのルートにあった高昌国(トルファン)の寺で幼いときから仏教を熱心に学んでいた。そして十九歳の時(四二五年ごろ)、印度の各地を旅して戻ってきた智猛という僧侶が立ち寄り、そ

の冒険譚を聞いて感動し、師友二十九人と共に、天竺に向かった。法頭の印度旅行よりほぼ二〇年後である。そして、投身餓虎を記念する塔と僧院があつた場所にも直接訪れて、その写本を入手したと言われている。彼が訳したのはこの經典一つだが、今は失われた旅行記『歴国伝』四巻も書いていたようで、それも日本に伝わっていたらしい。この無くなってしまった『歴国伝』だが、実は失われた『名僧伝』の著者でもある五世紀の宝唱という学僧が編纂した、世界最初のサンスクリット語中国語辞典である『翻梵語』の中に五十九語が引かれている。これを巻数ごとと並べると、法盛がどういうルートで旅をしたかがだいたいわかる。さらに『翻梵語』には、やはり失われた曇無竭(法勇)の旅行記『外国伝』からの引用も六十語あまりもある。曇無竭(法勇)は幽州黄龍国(満州あたり)の人で、四二〇年に二十五人の仲間と天竺行きに出発しており、その途中高昌国に寄っている。その年代、人数、ルートがほぼ一致していることから、筆者は、法盛が「師友二十九人」と一緒に出かけたと伝えられているのは、ちょうど、四二五〜四二六年頃、曇無竭の一行が高昌国に至り、そこに法盛の仲間が加わって西に旅を続けたのではないかと想像している。『歴国伝』と『外国伝』に出てくる地名を、昔、小野玄妙博士が注目して、地図を睨みながら研究に手を染められ、いずれ深く研究したいと願っておられた。ただ

問題は、小野博士が『歴国伝』の著者が智猛で、『外国伝』の著者が法盛であると勘違いされたことだ。そのため少し時間がずれ、一緒に行ったとは考えられていない。しかしこの二つの旅行記並びに曇無竭についてわかっている伝記では、二人とも最後はスリランカに行き、海路中国に戻っている。ただ、法頭がガンジス川河口の港から船でスリランカに行ったのに対して、彼ら二人はさらに南に旅行してからスリランカに渡ったということだ。法頭はそもそも出発したときに六十歳の高齢であつたので、あまり長い旅行は出来なかつた(たつた(一)十二・十三年)し、早く中国に帰って、手に入れた經典を訳したかつたのかもしれない。困難と危険を顧みず、仏教への篤い信仰心に支えられて、パミール高原の雪の冷たさ、インダス川上流域の深い谷を挟む崖道の命がけの旅を乗り越えて、投身餓虎塔(現在のマルダーンあたりと考えられている)に辿り着き、参拝した求法僧達は、菩薩の慈悲心に思いを馳せ、勇猛心をあらためて奮い立たせたことであろう。

#### 【註】

- (一) スリランカで知られている文献的根拠については、その後だいたいわかつたが、ここでは割愛する。ただ四一〇年から四一二年頃スリランカに滞在した法頭は、この物語がスリランカで知られていたことを記録している。また、ガンダーラでも同じ仏塔に参拝し、その精舎の盛んな様を記している。
- (二) この表記についてはあえて原文通りとする。

(本学教授)

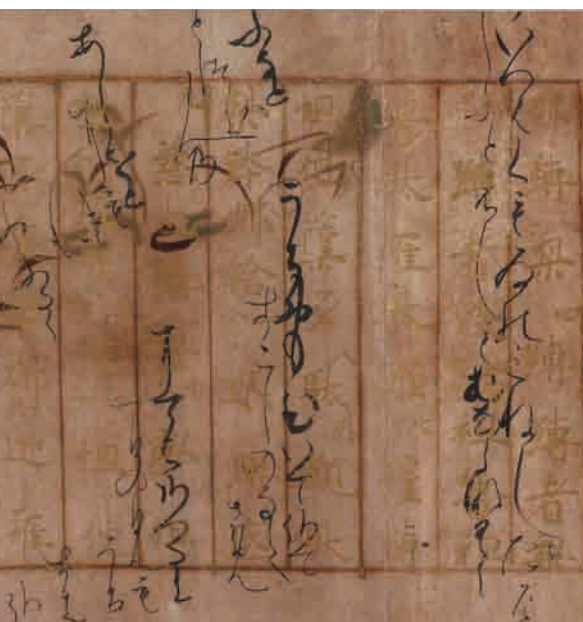


## 金剛寺伝来の『宝篋印陀羅尼経』二本と舎利信仰

小島 裕子

河内長野に所在する天野山金剛寺に二本の『宝篋印陀羅尼経』が伝来する。一切経を所蔵する寺としても知られる古刹であるが、それは一切経書写の事業とは趣を異に、書写者個人の供養の跡を残し、本経に対する信仰と文化的な背景が料紙に刻まれた「装飾古写経」として注目される。

その一つは、故人に纏わるとみられる消息や和歌、今様（平安後期流行の歌謡）の書の紙継ぎにより調卷された料紙の表、当初の墨書の上に、本経が金泥で重ね書きされるかたちで書写されている。大正十一年四月に旧国



「金泥写経本」仮名消息と葦手絵

宝指定され、現在は重要文化財として東京国立博物館に

寄託されている。縦一三・二厘（修補部を除く本紙）という小巻は宝篋印塔への納経を想像させるもので、鍍泥の界線と金泥による経文字とが贅をこらした書写当時の莊嚴を彷彿とさせる。料紙内には葦手文字があしらわれた箇所もあり、『葦手下絵和漢朗詠集』や『久能寺経』、『平家納経』などに通じる装飾を留める。また、経の後段に位置する陀羅尼の書写部分には漉き返し（宿紙）が用いられており、故人に対する供養の意を汲むことができる。卷子の中段に位置する結縁文の末尾には「嘉応二年八月十五日、馳疎筆了、安応聖人最末弟砂門寂真」とあり、経の書写もこの嘉応二年（一一七〇）を下らぬ平安末から鎌倉初期頃までのものと推定される。これを仮に「金泥写経本」と称することとする。田中塊堂氏『日本写経総覧』（昭和二十八年）に載る。なお貴重図書影本刊行会よりモノクロームの原寸複製（鈴木三七氏解説、昭和七年）が刊行されている。

いま一つは、紙継ぎされた消息を紙背にして本経が書写されるもので、明治四十三年四月に旧国宝指定され、現在は重要文化財として金剛寺に所蔵されている。縦二五・七厘（本紙）、料紙の表裏に具引きの莊嚴が施されることで、経自体が厳かな輝きを保っている。経の本文

部の書写は鎌倉前期と推定され、末尾に時代の下る鎌倉後期と推定される中国呉越王銭弘俶の宝篋印塔に関する「宝篋印経記」が後補される。これを仮に「墨書写経本」（表紙写真）と称することとする。

いまここに両経の研究史をつぶさに記す紙幅はないが、その発見から現在に至る研究の眼差しに少しくふれるならば、「金泥写経本」は、大正十年に黒板勝美氏により発見され、料紙に今様や和歌が見いだされたことから主に国文学研究者からの注目を集めた。『新編国歌大観』第十巻 補遺編（平成四年）や『続日本歌謡集成』巻一中古編「新編今様集」（昭和三十九年）にそれぞれ新出の和歌・今様として収録された。和歌については近藤喜博、中村文氏らに、今様については佐佐木信綱、植木朝子氏らに注釈を交えた研究がある。その装飾経としての意義については鳥谷弘幸氏に古筆学研究からの詳論がある。筆者が本経に関心を抱いた契機は、この「金泥写経本」に今様が記されていることにあつた。それは後白河法皇編纂の『梁塵秘抄』など、これまでに詞章が知られる今様には見いだされない新出の十三首であり、『梁塵秘抄口伝集』の編纂時期と重なる嘉応年間の書写として、現存する今様のなかにおいて古さを誇る。何よりも経典書写という実際の信仰を伴う料紙と歌とが一体となった事例は稀少であり、経典研究とともに解明されることの重さを感じるところである。

この今様段は、西行出家の誘因とされた友の死を悼む和歌（『西行物語』）に相似た「昨日見し人今日はなし」という歌を冒頭に配置し、故人が女性ではないかと思わせるような『源氏物語』須磨・明石、御法の巻の紫上の心情に重なる歌を含み、阿弥陀浄土への往生へ帰結する歌を末尾に据え、極楽往生を願う結縁文で結ばれる。ここまでの筆が一連をなしていることから、故人に対する思い





東京国立博物館蔵『宝篋印陀羅尼經』

と往生までの物語を既存もしくは新作を含めた今様を用いて配列・構成したものと想像される。また和歌段は、中村氏の研究により後白河院女御の平滋子（後に建春門院）の皇后宮女房と高倉帝の家臣が大井河へ遊覧した仁安三年（一一六八）の紅葉詠であることが明らかにされている。落飾して仁和寺法金剛院に止住する上西門院からも歌が寄せられていたり、建春門院周辺で今様を謡う環境が認められること（『たまきはる』）などからも、後述するように、当初の墨書・調卷・写経から金剛寺への伝来をも含め、院政期の女院文化圏（王権）がその背景にあったであろうことが想像される。経内の陀羅尼とは別に末尾に後補される二度の陀羅尼の書写は、忌年ごとに陀羅尼を新写して加えてゆく本経の供養法を反映するものと認められる。

一方の「墨書写経本」については、多くの言及は認められないが、前掲の近藤氏の指摘のほか、荻野伸三郎氏が高山寺十無盡院蔵の「宝篋印経記」を付す永暦元年（一一六〇）の『宝篋印陀羅尼經』栗原柳庵の『題跋備考』収載で知られる（の存在にふれ、同金剛寺本の発見について記している）<sup>5</sup>。

金剛寺本を離れて本経に関する研究を追えば、近年、寺院史研究からの指摘が注目される。上川通夫氏に呉越国や宋国の仏教事情との関連から日本への本経の請来や舍利を本尊とする如意宝珠法<sup>（にいはうじゆほう）</sup>の成立に関する卓越した論があり、皿井舞氏に『覚禅鈔』の造塔法に関する視点から、西山美香氏に鎌倉將軍の八万四千塔供養を明かす視点からの言及がある。また平岡定海氏に東大寺再興重源の意匠による本経の運慶作南大門仁王（阿吽）像の胎内納入についての指摘がある<sup>6</sup>。なお考古学では主に鎌倉期以降に造立される石造宝篋印塔の研究が主であるなか、三木治子氏に經典との関係を視座に入れた網羅的な論があり、金剛寺に関する言及もある<sup>7</sup>。総じて舍利信仰の歴史と切り離しては考えられない本経であることが確認されるが、その請来と流布の実情について、經典本文の文献学的な精査から捉え得ることのいくつかを、金剛寺本に照らし述べてみたい。

本経の正式な名称であるが、「一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經」と称し、一切如来の全身舍利の功德を積聚する陀羅尼の意で、経内には「尊勝陀羅尼」や「阿弥陀根本陀羅尼」とともに三陀羅尼の一つである「宝篋印陀羅尼」（四十句）が収録されている。経の伝えるところによれば、仏陀は摩伽陀国のある婆羅門の邸へ供養に向かう途次、古朽の塔を発見された。塔上に大光明が放たれ、讃嘆の声がわき起こるなか、塔は如来の全身舍利を納めるもので、その塔中に陀羅尼の法要が在るとの深大な功德をお説きになられた、という。本経が宝篋印塔へ納められるのは、この經典を「法舍利」とする信仰に基づくものであり、造塔・書写の作善が説かれている。

中国唐代の經典目録である『開元録』や『貞元録』に撰述され、空海・円仁・円珍三家の『請来目録』に経名がみ

られる。本經典は、『大正新脩大藏經』第十九卷 密教部二（以下、大正藏）に二本が収められ、いずれも不空三藏の訳本とされるものの、両本には異同が多く認められる。すなわち大正藏A本（No.1022A）は高麗版大藏經を底本とし、大正藏B本（No.1022B）は江戸期の享和版長谷寺藏本を底本として、脚注に「此經麗本（高麗本）ト大異アル故ニ別ニコレヲ載ス」と記される。金剛寺伝来の二本はともにB本、いわゆる流布本の系統に相当する古写経といえる。現在、本文を確認し得る古写経の多くはこのB本の系統に属する。本経の重要性に比して、經典自体の先行研究は中野隆行氏の『宝篋印陀羅尼經広本の日本成立に関する一試論 平安末期台密所伝の諸本の分析』や「宝篋印陀羅尼經論・後期―総括および大陸における展開―」の研究<sup>8</sup>においてほかになく、同氏は校本研究を丹念に追及されるなかで、B本は日本撰述であるとの見解を提示された。

一切経諸本の校合により浮かび上がる日本撰述とらしい箇所は、陀羅尼部の後段、経末の改変・増広部にある。日本撰述經典の研究を遂行される落合俊典氏の提言によれば、和習、すなわち思想用語に加えて日本漢文を多用しているか否かがその判断基準になるとされ、その頻出の程度を計測することが肝要であるとされる<sup>10</sup>。当該の利生段には「地獄門破、菩提道開」などといった和様の漢文用法が所々に認められる<sup>11</sup>。また内容的には、造塔・塔前での同陀羅尼による「法要」の功德が掲げられ、地獄に堕ちた悪人の子孫が亡者の名を称えて陀羅尼を誦み上げれば亡者はたちまち極楽界に至る、という功德から語り出され、官位榮耀、寿命富饒、怨家盜賊、怨念呪詛、疫癘邪氣、善夫良婦、賢男美女などの利生譚が並ぶ。こうした流布本系の利生譚は、陀羅尼の前段に説かれるところの「末法」にも不滅の経であるとの本経の功德を前提に、具体的事例が唱導体で綴られるものであり、また後世菩提・現世福德のために

釈尊（宝篋印塔中安置の舍利説、大日如來說）を本尊として修する諸尊法としての「宝篋印陀羅尼經法」という秘法の執行が、当代に盛んであったことと決して無縁ではない。

ところで、院政期から鎌倉初期にかけて盛行したことが認められる本經は、江戸期の学僧のもとで再び画期を迎えることとなる。長谷寺の亮汰が注釈を手がけた『宝篋印陀羅尼經鈔』（寛文十三年（一六七三）をはじめとし、大正蔵がA本の対校に掲げた浄嚴の黄檗版加点本（元禄十六年（一七〇三）尊教再校）や、その弟子蓮体による『宝篋印陀羅尼和解秘略釈』（正徳二年（七一三）などがある。そうしたなかで台密の学僧寛千の『自在金剛集』第三「宝篋印經」（享和三年（一八〇三）頃）の記述が注目される。すなわち「此經ハ和本勝レタリ。亮汰ノ註アル經ナリ。和本ニハ亡者ノ追福ニナルコト説テアリ。亡者ノ為ニハ此經勝レタリト。鳥羽ノ僧正ノ給ヘリト聞ク。今ノ明本ニハ脱セリ」という。「明本」すなわち明の万暦版を覆刻した黄檗版一切經（鉄眼版、天和元年（一六八一）には、「和本」にある亡者の追福のことはないとの見解がここに示されているのである。

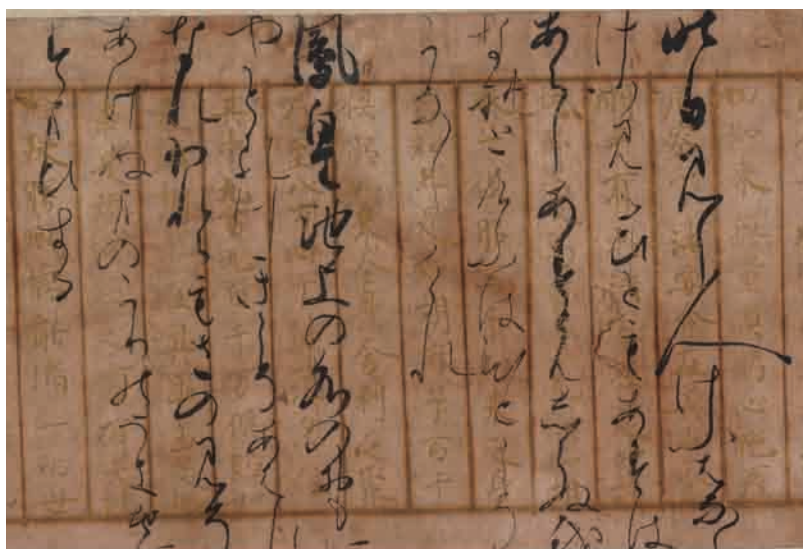
「和本」とは「唐本」に対する和書の意で、大正蔵B本の底本となった長谷寺の享和版（享和元年（一八〇一））を示し、その秀逸なる旨が述べられて日本撰述經典に対する評価がなされている。加えて注目すべきは、鳥羽僧正範俊が亡者の追悼に本經が勝れていると述べた、という院政期への言及がなされている点である。「和本」（大正蔵B本系）の利生譚の中には、同陀羅尼の法要は「如意宝珠」の一切の願を満たす功德の如きものであるとあり、範俊が舍利、すなわち宝珠を本尊とする最極深秘の如意宝珠法の修法を勧める見地から本經に対して残した言と思われる。また、法然上人門下の長西が撰述した『浄土依憑經論章疏目錄』の群經録に『無量寿經』や『阿弥陀經』など

の浄土經典に並び書目が挙がる。『徒然草』に同上人門下の乗願房が往生の効験がある最たる經典として本經を挙げた話が載るが、これらは流布本系の利生譚に相応し、当代における本經の趨勢を捉えた逸話として興味深い。

一方で、本經の書写の歴史には、空海の『三十帖策子』に収録された最古本や真福寺蔵金剛寿院（叡山）書写本、一切經収蔵本など、大正蔵A本系の古写經の存在もある。中国の經録に記載され、一切經の請来・書写という過程を経て現存する本經と、陀羅尼後段の利生譚にわが国独自の展開をみせる双方の書写本を丹念に追うことが、わが国における本經の受容のあり方を顕著にする道であろう。金剛寺伝来の二本は、大正蔵の底本を遡る成立年代であることに加え、具体的な舍利信仰の痕跡を經典内に留めており、本經をめぐる歴史的、文化的様相を広く見だし得る古写經としての価値が認められる。

以下、本經に関わる金剛寺の舍利信仰について少しかりふれておく。金剛寺は、阿育王（アショカ王）造立の塔を基として聖武天皇の勅願により行基が開基したと伝えられ、後白河院の帰依と庇護のもと、中興の阿観上人（一二三六―一二〇七）により承安元年に造営が始められ、治承二年（一一七八）に金堂の建立、同四年（一一八〇）に院の異母妹八条女院（一二三七―一二二一）の祈願所となったという寺歴がある。その後、建久九年（一一九八）に後白河院皇子守覚法親王のもとで仁和寺北院末となつて今日に至っている（真言宗御室派）。

『河内名所図会』（以下『図会』）金剛寺の項の「天野山什宝大略」によれば、「天竺阿育王鉄塔 正和三年忍実上人 当山塔の尾にて感得し給ふなり 日本三箇の靈宝の其一なり」とあり、釈尊の舍利をめぐる阿育王信仰が伝えられるが、『河州錦部郡天野山金剛寺古記寫』<sup>3</sup>には、本願（阿観）より



「金泥写經本」今様

九代目の学頭とされる阿闍梨忍実の鉄塔感得の伝承が載る。すなわち往古に鉄塔の御奉納所とされるもその所在地は不明であったが、上人が御影堂から塔尾に光明が上がるのを見て尋ね行き、鉄塔を発見したという。これは天竺阿育王に準えた具越王銭弘俶の八万四千塔供養の鉄塔伝承と思われるが、当該の鉄塔は実際に慶長十一年（一六〇六）の再興時まで多宝塔（塔婆）の真柱に納められていたとされ、同寺の銭弘俶塔（銅製、河内長野市指定文化財、昭和四十七年）がこれにあたるものと推測される<sup>14</sup>。鉄塔感得の正和三年（一二三四）は「墨書写經本」に後補される「宝篋印經記」の推定年代にも近く、当代に銭弘俶塔を多宝塔に納めるに臨んで同記が加えられたことが考えられる。



この多宝塔（国宝）であるが、昭和十四年に解体修理中の基壇から火葬骨（少量）を納めた白磁壺が発見され、同壺を封印するように、その上方に梵字が墨書された石（長さ一尺八寸、幅一尺）が埋納されていたという報告がなされている<sup>⑤</sup>。この梵字がまさに三度書された「宝篋印陀羅尼」であった。同石については地鎮の鎮壇作法に関するものとの説が立てられたが、仁和寺の蓮華心院に葬られたとされる八条女院（法名金剛観）の分骨との見方が提示されてもおり、同陀羅尼が亡者の追悼や往生を促す利生があることから鑑みて、女院の菩提を弔う法儀であった可能性が最も高い。正安四年（一三〇二）には、仁和寺法親王庁が同寺住僧に宛てた下文（「金剛寺文書」）に、後白河院と女院の菩提のために永代結縁灌頂を行わせる旨が見られ、先の正和三年の鉄塔相承、「墨書写経本」の「宝篋印経記」の後補のことがこれに符合するものと思われる。となれば、本経の紙背に認められた消息も女院に関わるものとの見方を含めた検討が要されよう。同寺の古記録に、本経一卷について「裏に頼朝公御真筆の仮名の文がある」との記載も見いだされるが、或いは女院自身の消息なども織り交ぜられていることもあるか。また、かの写経のいずれかが明恵上人筆であるとの伝えもある（『図会』）。金剛寺中興の次代と次々代の住持を八条院女房の浄覚、覚阿の姉妹が務めており、八条院と頼朝との関



「金泥写経本」「宝篋印陀羅尼」書写部分

係しかり、二本の本経がそうした伝承とともに同寺に伝来するもの、その歴史に照らして故なしとしない。

ところで不空訳とする本経は、いわゆる「大乘密教」に属する經典であるが、それは不空が師金剛智の没後に天竺へ赴いた際に師子国（セイロン、現スリランカ）の地で取経し、帰唐して翻訳するに至った南方系密教の正統經典の一つであったことが推測される。当時の都であったアヌラダプラのアバヤギリ遺跡に蔵される石刻の「宝篋印陀羅尼」の存在は、金剛寺多宝塔の陀羅尼を写した石と思ひ合わせて興味深い。——思ひは遙か經典伝来の道を包むアジアに及ぶなかで、本経がわが国に根ざし、盛行したことの真意を、金剛寺伝来の二本の經典を主軸に据えた文献学的研究から、さらにたどってみたい。

#### 【附記】

このたびの二經典の披見は、金剛寺堀智範御座より特別許可の御心慮を賜りましたことによるものです。調査にあたりましては、後藤昭雄先生の御配慮のもと、東京国立博物館において落合俊典先生、海野圭介先生と閲覧の機を得、閲覧に際して田島島哲調査課長に御世話になりました。ここに深謝の意を申し上げます。画像提供は東京国立博物館 Image: TNM Image Archives Source: <http://TnmArchives.jp/>

【註】紙面の関係で先行研究を網羅できないことをお断りする。

（1）江上綏氏「金剛寺の宝篋印陀羅尼経」（『日本の美術』四七八）葦手絵とその周辺（二〇〇六年）。

（2）近藤喜博氏「天野山金剛寺「宝篋印陀羅尼経」料紙和歌」（『国学院雑誌』五十八—二、昭和三十三年）。中村文氏「平親宗和歌事績」（『大井河行楽和歌』）を中心に、「立教大学日本文学」五十九、昭和六十年初出、後に『後白河院時代歌人伝の研究』笠間書院、二〇〇五年）。

【国歌大観】解題は同氏執筆。

（3）佐佐木信綱氏「嘉応年間書写の今様歌（増訂「梁塵秘抄」明治書院、大正十二年）。植木朝子氏「宝篋印陀羅尼経」今様にのこる一歌謡における「源氏物語」撰取の一例として」（『十文字国文』九、平成十五年）。「続日本歌謡集成」は新聞進一氏編。

（4）島谷弘幸氏「金剛寺本「宝篋印陀羅尼経」の意義—消息経流行の一例として—」（『古筆と国文学』八木書店、昭和六十二年）。

（5）荻野伸三郎氏「宝篋印経」古写本と八万四千塔について」（『仏教史学』一九、明治四十四年）。

（6）上川通夫氏「末法思想と中世の「日本国」」（『再生する終末思想』青木書店、二〇〇〇年）、「如意宝珠法の成立」（『覚禪鈔の研究』親王院堯栄文庫、平成十六年）。皿井舞氏「勸進と結縁の思想的背景——『覚禪鈔』造塔法を手掛かりとして——」（同上所収）、西山美香氏「鎌倉將軍の八万四千塔供養と育王山信仰」（『金沢文庫研究』三一六、二〇〇六年）。平岡定海氏「東大寺南大門仁王像彫刻像納入宝篋印陀羅尼経について」（『日本歴史』五〇九、一九九〇年）。

（7）三木治子氏「石造宝篋印塔と宝篋印陀羅尼経」（2）（『歴史考古学』四十一、平成九年）。（1）（4）迄の連載。

（8）ほかに、宋施護訳「一切如来正法秘密藏印心陀羅尼経」（No.1023）を収録する。

（9）中野隆行氏、前者は私家版による刊行（二〇〇六年）、後者は『成田山仏教図書館報』（復刊第七十七号、平成十九年）所収。

（10）『日本撰述經典研究序説』（牧田諦亮氏監修、落合俊典氏編集『七寺古逸經典研究叢書』第五卷 中国日本撰述經典（其之五）—撰述書（大東出版社、二〇〇〇年）。

（11）前後を引用すれば、「洋銅熱鉄忽然變為八功德池。蓮生承足宝蓋駐頂。地獄門破菩提道開。其連如飛至極樂界」。通常は、「開菩提道」（菩提流支訳『大宝積経』No.310）、「破地獄門」（不空訳『施餓鬼飲食及水法』No.1315）と記述される。

（12）『大日本仏教全書』天台部四、二三一 寛政三年（一七九二）所収。

（13）『続々群書類従』第三所収。

（14）『河内長野市史』第十巻 別編二 建築 美術工芸（昭和四十八年）、関根俊一氏「銭弘俵八万四千塔について」（『MUSEUM』No.439、一九八七年）。

（15）『河内長野市史』第一巻（上）本文編 考古 上田宏範氏著（平成六年）、『国宝金剛寺塔婆及鐘樓修理報告（国宝金剛寺塔婆及鐘樓修理事務所編纂、昭和十五年、後に「戦前期国宝・重要文化財建造物修理工事報告書集成」第十八巻、文生書院、平成十七年）。

（16）アヌラダプラ博物館蔵。N.MUDIYANSE Dharani Stones from Abhayagiriya, MAHAYANA MONUMENTS IN CEYLON, 1967. G.Schopen "The Text on the Dharani Stones from Abhayagiriya, FIGMENTS AND FRAGMENTS OF MAHAYANA BUDDHISM IN INDIA, 2005. 馬場紀寿氏にスリランカを経由して展開する本経を含めた大乘經典の指摘がある。（特任研究員）



## 中国国家図書館

## 中国へ渡った日本古写経

我々は成田空港から中国国家図書館のある北京へ飛び立った。成田より北京へは、便にもよるが四時間弱で着く。北京首都国際空港は、二〇〇八年に巨大な第三ターミナルがオープンし、アジア最大規模の空港となっている。日系航空機はその新ターミナルに降り立つ。到着ロビーは天井が高く開放的だ。空港から北京中心部へは地下鉄・バス・タクシーなどの交通機関がある。タクシーで中国国家図書館付近までは一時間とからない。

中国国家図書館は、かつて「北京図書館」（略称「北図」と呼ばれていたが、一九九八年現在の名に改称された。国家図書館には総館と古籍館がある。総館は故宮の北西方向・北京動物園の西に位置し、古籍館は北海公園西側にある。古写経調査でいつも訪れるのは総館であり、「中国国家図書館」と言うときはこちらを指すのが普通である。総館は、地下鉄四号线「国家図書館駅」が目の前にあり、交

通の便は以前と比べて大変よくなった。とはいえ、ホテルは近くがよい。図書館から徒歩約一〇分のホテルをいつも予約する。日系で使いやすく、近くにフランス系スーパーがあるというのも理由だ。

総館には南区と北区がある。南区は一九八七年に完成した本来の館である。重厚な構えの建物で、正面から見ると左右に回廊が伸びているように見える。二〇〇八年その北側に新館が建設された。それが北区である。おしゃれなカフェもあつてくつろげる。南区に善本特蔵閲覧室があり、我々はそこで調査をする。南区は二〇一一年五月より改修工事に入っており現在は使用できない。工事は二〇一三年完了予定である。善本特蔵閲覧室は二階にある。重厚な机と椅子、そしてマイクロフィルムリーダーも並んでいる。机は広く卷子本などの調査も行いやすい。場合によっては木製の文鎮も貸してくれる。調査では、いつも善本特蔵部副研究館員の李際寧氏にお世話になる。李氏は、本学落合教授と旧知の仲であり、本学に客員研究員として来られたこともある。知人が来たとなると他の係員も親切に扱ってくれて手続きがスムーズに進む。貴重書閲覧ともなると、正規の手続きだけでなく人間関係も重要であること

が感じられる場面である。

当館は約二、九〇〇万冊（二〇一〇年現在）もの蔵書を有する。敦煌遺書・趙城金藏・永樂大典・四庫全書は殊に有名である。仏教古籍では、趙城金藏などの他に、明治期などに日本より流出した古写本も蔵している。中には奈良写経も含まれる。私は、趙城金藏本『賢愚経』巻第六と日本古写経数点を閲覧した。趙城金藏の影印は『中華大蔵経』に収められており、誰でも簡単に目にすることができる。しかし、実際に見た金藏本『賢愚経』には、影印本にはない朱印が巻末に押されていた。これには驚いた。やはり原物は



中国国家図書館（総館） 南区正面

実見すべきである。そこから経の来歴もわかるというものだ。調査の醍醐味はまさにここにある。日本古写経では、袋中（二五五二―一六三九）の蒐集した古写経を中心に調査をした。平安鎌倉写経数点の他に、奈良写経も一点実見した。それは袋中蒐集経ではなかったが、北京で奈良写経を調査できた意義は大きい。

外国で日本古写経を調査すると少々不思議な感覚を覚える。まるで海外で日本人に出会ったような感覚、更に、一体どのような経緯でこの地までやって来たのかという点に興味を覚える。袋中蒐集経の場合は、江戸末期に寺外へ流出したものを、明治期に來日していた楊守敬（一八三九―一九一五）が入手して中国へ持ち帰り、紆余曲折を経て中国国家図書館所蔵となった。海外での古写経調査では、そういった流出の歴史を感じずにはいられない。来歴も含めて分析することが古写経研究には求められよう。

「かつて私は日本にいたのだ」という古写経の声を聞いて、発展目覚ましい北京を後にした。

## 【謝辞】

調査中大変お世話になった李際寧氏はじめ中国国家図書館の方々、また当館所蔵の日本古写経をご教示いただいた梶浦晋氏に深く感謝致します。

（三宅 徹誠）



# 古写経とデータベースの研究上における活用

ラポー ガエタン

現在、パリ国立高等研究院（EPHE）宗教史学科、およびジュネーブ大学日本学科に提出する博士論文を準備中で、論文執筆にあたり依拠すべき基本的参考史料を参照するために日本古写経データベースを利用して頂いています。博士論文では、14世紀に活躍した真言宗の僧侶文観房弘真について研究しているのですが、従来認知されて来なかった文観の著作の存在が、近年日本各地で次々に確認されていることから、こうした未翻刻の聖教を読み解くことが研究の出発点となっています。

端宗派の大成者としての文観の人物像を裏付ける教理上の根拠の一つにもなってきたと言えます。

具体例を一点挙げれば、『御遺告大事』（仁和寺本、嘉暦二年（一二三二））にお



『菩提心論』江戸期版本

日本中世の聖教には、仏教經典（經、疏など）が頻繁に引用され、このような先人の經典は聖教で展開される教理や儀礼を正統化するための論理の要となっています。文観関連の聖教の場合、高麗版を典拠とする大正新脩大藏經に収録されている經典原文と、文観による引用が一致しないことが多いため、先行研究においてはこうした箇所が文観による創造や曲解であると認識され、立川流という異

いて、菩提心論が展開される「内心中観」と呼ばれる箇所があるのですが、ここで文観は「於内心中、観日月輪」と著しています。従来の仏教研究で必ず参照されてきた大藏經での『菩提心論』には「於

内心中。観日月輪。」とあることから、この解釈は日本中世に生まれた「異説」として理解されてきました。しかし、日本古写経データベースを利用することで、「観日月輪」が江戸時代の『菩提心論』版本にも見られる表現であるということが明らかになり、これが異説であると断定することは出来なくなります。

この様な差異が生じている理由には、写本における写し間違いや筆者自身の誤りだけでなく、従来研究で經典典拠の基本とされてきた高麗本の經典と、実際に日本中世において普及し、使用されてきた經典・古写経が異なるという史的背景も考え得るのでは無いでしょうか。上記の例からも分かる様に、基本經典の版本・写本による原文の異同は、聖教に展開される思想や、それを著した人物の歴史解釈にまで影響を与えるような因子と言えます。文観関連聖教に限らず、日本中世の聖教を翻刻し、当時の仏教世界の文脈に位置づける上で、大正新脩大藏經のみに絶対的な經典の典拠とせず、日本古写経データベースに収録されるような日本伝来の經典を参照することが重要となってくるでしょう。

（東京大学史料編纂所外国人研究員）

## 平成二二・二三年度「日本古写経を利用した仏典研究への助成金」給付の報告

本学では平成二二・二三年度に、古写経を積極的に利用しようとする若手研究者に対しての研究助成金を公募により給付致しました。

【助成内容】 一人年間五〇万円

平成二二年度受給者

- ・チクダグリン（京都大学人文科学研究所研究生）
- ・趙 青山（名古屋大学蘭州大学聯合培養博士研究生）
- ・ラポー ガエタン（東京大学史料編纂所外国人研究員）

平成二三年度受給者

- ・駒 法明（佛教大学非常勤講師）
- ・伍 小劬（中国人民大学佛教與宗教學理論研究所研究員）
- ・藤井 淳（駒澤大学仏教学部仏教学科専任講師）

\*所属、役職等は応募当時のものです。

## 宮井里佳・本井牧子 編著『金藏論 本文と研究』

平成二三年度 新村出賞受賞！

本戦略プロジェクト研究分担者の本井牧子氏、学外研究協力者の宮井里佳氏による研究成果『金藏論 本文と研究』が新村出賞（新村出記念財団主催）を受賞致しました。



臨川書店  
2011年2月刊  
定価 15,750円

# 活動記録

日本古写経研究を世界に紹介

## 国際仏教学会でのパネル発表

林寺 正俊



会場の法鼓佛教學院

ラ所縁の捨身飼虎物語——『仏説菩薩投身  
(餉) 餓虎起塔因縁経』

③ 齊藤達也 (本学図書館員)

“Features of the Kōgō-ji Version of Further Biographies of Eminent Monks: With a Focus on the Biography of Xuanzang in the Fourth Fascicle” (金剛寺本『続高僧伝』の特徴——巻四玄奘伝を中心)

(新出の日本古写経『梁高僧伝』——刊本との比較に基づく成立問題の一試論)

会場には常に二五〜三〇人程の研究者がいて、各発表を熱心に聞いており、発表毎に活発な質疑応答や意見交換が行われた。当パネルと同じ時間帯には他に一〇もの部会が開かれており、「あいにく古写経パネルは聴きに行けない」と残念がっていた研究者もいた。

国際仏教学会(略称 IABS=International Association of Buddhist Studies)は、

一九七八年にコロンビア大学で開催された学術大会を嚆矢として、昨今では三年に一度の頻度で開催されている、世界最大規模の仏教学会である。第一六回目の学術大会を迎えた今回は、台湾の法鼓佛教學院を会場として開催された。台北市内から車で一時間ほどの距離にある当学院は、今日仏教学者の間で広く利用されている CBETA (漢訳仏典のデータ CD) などの各種出版物を出し、また仏教を専門的に学ぶ学生を擁する台湾屈指の仏教系教育研究機関であるとともに、僧俗の両方に対して坐禅などの実践指導を行う寺院でもある。ここに世界三二カ国から約六〇〇人の研究者が集まり、六月二〇日から二五日までの六日間にわたって約五〇〇の研究発表が行われた。部会とパネルの数は合計で一〇〇近くにものぼった。

当プロジェクトでは日本古写経の研究成

果を海外にも紹介すべく、特別にパネルを設け(パネル名“The Ancient Japanese Manuscripts”)、プロジェクトの代表者である落合俊典(本学教授)をはじめとする六名が英文による研究発表を行った。司会進行はデレアヌ フロリン(本学教授)が務めた。発表者および英文発表題目(括弧内はその和訳)は以下の通りである。

① 落合俊典(本学教授)

“On Ancient Japanese Manuscript Copies of the Dīghanakapariyeca-sūtra” (日本古写経本の『長爪梵志請問經』について)

② 松村淳子(本学教授)

“A Unique Vyāghrī-jātaka Version from Gandhāra: The Foshuo pusa toushen (yī) ehu qita yinyuan jing (T.172)” (ガンダー

④ 林寺正俊(本学日本古写経研究所 主任 研究員)

“The Newly Found Text of the Puxian pusa xing yuan zan (Bhadraçaryāprajñāna) in the Kōgō-ji Manuscript Collection” (金剛寺一切経中の新出本『普賢菩薩行願讚』)

⑤ 池麗梅(鶴見大学准教授)

“Reception and Transformation of the Huiji Jin'gang shuo shentong daman tuoluoni fashu lingyaomen” (『機積金剛說神通大滿陀羅尼法術靈要門』の受容と変容)

⑥ 定源(王 招国)(本学戦略プロジェクト 研究員)

“Newly Discovered Japanese Manuscript Copies of the Liang Biographies of Eminent Monks: An Examination of the Problem of the Text's Development based on a Comparison with Printed Editions”



パネル発表の様子

なお、パネル会場には学術フロンティアの成果出版物を展示し、来場者にはニューズレター「いとくら」を配布して、日本古写経研究と当プロジェクトの紹介に努めた。(本学日本古写経研究所主任研究員)



## 第8回仏教シンポジウムへの参加

二〇一一年三月二四～二六日、カナダ・バンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学において第8回仏教シンポジウム「仏教文献学および写本学における最新の研究状況」(Reading under the Lines: Some Cutting-edge Progress in Buddhist Philology and Manuscriptology)が開催されました。

本学日本古写経研究所からは林寺正俊主任研究員が参加し、日本古写経の調査と研究を進めている本プロジェクトについて紹介すると共に、本学ホームページ上にて公開中の日本古写経データベースの実演を行いました。

### 公開研究会

昨年度第2回公開研究会、並びに今年度第1回公開研究会について、概要を報告致します(発表者の所属、役職等は研究会開催当時のものです)。

#### ○平成22年度第2回公開研究会

平成22年11月13日(土)

午後3時～4時半

於 国際仏教学大学院大学 春日講堂

中御門 敬教(知恩院浄土宗学研究所研究員)

「源信僧都と『普賢講作法』」

— 原本・写本、書写問題を中心に —

堀 伸一郎(国際仏教学大学院大学附置

国際仏教学研究所専任研究員)

「Sukhāvatīvyūhaネパール写本の識語について」

中御門氏は、源信僧都(九四二—一〇一七)

撰『普賢講作法』の現存最古写本と目される、比叡山坂本西教寺蔵本について、裏書きされる修補の記述、並びに巻首の貼紙剥落跡より、その伝来の経緯として芦浦観音寺瞬興によって、葛川息障明王院から伝来されたものであることを明らかにされた。また院政期書写の随心院蔵本、同じく源信の著作である『靈山院釈迦堂毎日作法』の聖衆来迎寺所蔵本と比較することにより、平安末期から院政期における学僧の聖教書写の実態にも言及された。

堀氏はKotatsu Fujita, *The Larger*

*Sukhāvatīvyūha: Romanized Text of the*

*Sanskrit Manuscripts from Nepal*, Part II

(Tokyo: Sankibo Press, 1993), pp. 1478-

1479に掲載されるSukhāvatīvyūha梵文ネ

パール写本K1の識語について、詳細な読解

を行われた。その成果として、本識語はサ

ンスクリットとネパール語が混在するもの

であり、筆写者は、Amṛtānanda、筆写完了

日は西暦一七九八年一月一三日であるこ

と、写本作成の目的や経緯等を示された。

また、ネパール写本識語の有する情報量の

豊富さに注目され、そのデータベース構築

の有用性に言及された。



平成23年度第1回公開研究会の様子

#### ○平成23年度第1回公開研究会

平成23年5月21日(土)

午後3時～4時半

於 国際仏教学大学院大学 春日講堂

上杉 智英(本学プロジェクト研究員)

「高麗大藏経再雕版の来歴

—『高麗国新雕大藏校正別録』を通じて—」

小島 裕子(学習院大学非常勤講師)

「金剛寺伝来の『宝篋印陀羅尼經』二本

—古写経に刻まれた歴史と文化—」

上杉氏は高麗大藏経再雕版編輯時における校正記録である守其等撰『高麗国新雕大藏校正別録』巻一二所収の「大智度論第十四卷」の校異について、実際に高麗初雕本・再雕本・房山石経本の『大智度論』巻十四を比較することにより、高麗再雕本が開宝蔵本を底本として版下を作成していることを明らかにされた。またその証左とし

て、高麗初雕版が欠筆せず、再雕版が欠筆している事例を呈示された。

小島氏は天野山金剛寺に伝来する二本の『宝篋印陀羅尼經』について、その概要を紹介すると共に、その研究史を整理され、従来、料紙に見出される和歌や今様に対する文学、消息経に対する古筆学など、個別研究の視座から論じられることの多かった金剛寺蔵『宝篋印陀羅尼經』に対し、故人の墨書と願主の写経の文字とが渾然一体となることが同経書写の最たる価値であるとの視点に立たれ、消息経、莊嚴経(葦手絵)、追善供養、今様成仏観・和歌即陀羅尼観、女院・女房の信仰等の文化的背景を総合的に把握することにより、本経が当に院政期文化の精華であることを顕彰された。

平成22年度第2回公開研究会、平成22年度第1回公開研究会ともに、多数のご来場を賜り、誠に有り難うございました。今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

#### 大学移転のお知らせ

昨年3月に、本学は港区より文京区へ移転しましたのでお知らせいたします。詳しい住所は裏表紙をご覧ください。



## 今後の予定

平成24年度の予定は以下の通りです。

### ◇公開研究会◇

5月と11月に、本学春日講堂にて開催予定です。

### ◇公開シンポジウム◇

7月21日(土)に『宝篋印陀羅尼經』をテーマとした公開シンポジウムを、本学春日講堂にて開催予定です。

## 既刊書

### ○『いとくら』1～6号(非売品)

本書は本学日本古写経研究所のホームページ上でダウンロードできます。バックナンバーを希望される方は下記連絡先にお知らせ下さい。

### ○日本古写経善本叢刊(非売品)

第1輯『玄應撰一切經音義二十五卷』

第2輯『大乘起信論』

第3輯『金剛寺藏觀無量壽經無量壽經優婆塞舍願生偈註卷下』

第4輯『集諸經禮懺儀卷下』

### ○『日本現存八種一切經対照目録』(非売品)

本書は本学日本古写経研究所のホームページ上でダウンロードできます。

### ○『佛教文獻と文學 日臺共同ワーク ショップの記録 2007』(非売品)

○『愛知縣新城市徳運寺古寫經調査報告書 徳運寺の古寫經』(非売品)

○『古写経研究の最前線—シンポジウム講演資料集成—』(非売品)

## スタッフ紹介

### 研究代表者

落合俊典(本学教授)

### 研究分担者

アレクサンドロフ(本学教授)

松村淳子(本学教授)

藤井教公(北海道大学教授)

赤尾栄慶(京都国立博物館学芸部副部長)

(上席研究員)

高田時雄(京都大学人文科学研究所教授)

金水 敏(大阪大学教授)

本井牧子(筑波大学助教)

林寺正俊(本学附置日本古写経研究所主任研究員)

三宅徹誠(元興寺文化財研究所嘱託研究員)

### 学内研究協力者

今西順吉(本学教授・学長)

津田眞一(本学教授)

木村清孝(本学特任教授)

末木康弘(本学附属図書館副館長)

斉藤達也(本学附属図書館員)

堀伸一郎(本学附置国際仏教学研究副所長)

赤塚祐道・小島裕子・田戸大智

(本学附置日本古写経研究所特任研究員)

蕭 文真・曹 凌(本学特別研究生)

その他、学外研究協力者多数。

プロジェクト研究員(PD)

上杉智英・定源(王招国)・南 宏信

プロジェクト研究補助員(RA)

楊 婷婷

(平成23年12月現在)

## CONTENTS

Toshinori OCHIAI, Manuscript <i>Tripitaka</i> and Xylograph <i>Tripitaka</i> .....	1
Junko MATSUMURA, The <i>Fo shuo pusa tou shen e hu qi ta yinyuan jing</i> : The Tale of the Buddha's Previous Life in Which the Bodhisattva Offered His Own Body to a Starving Tigress .....	3
Yasuko KOJIMA, The Two Versions of the <i>Bao qie yin tuoluoni jing</i> in the Kongō-ji Collection and the Cult of Relics .....	7
Tetsujo MIYAKE, Report on a First-hand Investigation at the National Library of China .....	11
Gaetan RAPPO, The Usage of Old Manuscripts and Database for Research Purposes .....	12
Shoshun HAYASHIDERA, Report on the Panel Presentation in the 16th Congress of the IABS .....	13
Report on the Open Seminars .....	14
Schedule, Publications, and Project Members .....	15

文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業  
「東アジア仏教写本研究拠点の形成」ニュースレター

Newsletter of the Strategic Research Project for Private Universities Granted by the Ministry of Education of Japan  
'Establishment of the Research Centre for East Asian Buddhist Manuscripts'

### いとくら 第7号

平成23年12月1日発行

編集・発行 国際仏教学大学院大学  
日本古写経研究所  
〒112-0003 東京都文京区春日2-8-9  
URL <http://www.icabs.ac.jp>  
E-mail [nihonkoshakyo@icabs.ac.jp](mailto:nihonkoshakyo@icabs.ac.jp)

印刷 株式会社 高山

### ITOKURA Vol.VII

Published by Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies  
2-8-9 Kasuga, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0003, Japan  
© Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies 2011  
Printed in Japan at Takayama Co. Ltd., Tokyo